



1～6年生の縦割りチームで遠足・清掃・ゲームなどを行っています。

(東雲小学校)

附属東雲小・中学校は今

附属東雲小・中学校は、旧広島市街地の東端に位置し、黄金山に抱かれ猿猴川を望む広く閑静な地に、営々たる歴史を刻んで今日に至っています。広島大学学校教育学部の前身である広島県師範学校の附属学校として誕生して以来、附属学校の使命である教育研究・教育実習生の指導・地域学校教育への貢献等において、先導的な役割を果たしています。今年からは、学校教育学部の西条への移転に伴って、プールやテニスコートの解体・新設等、施設・設備など環境の変革を進めています。

東雲小学校

東雲小学校の歴史

東雲小学校は、明治八年、広島県公立師範学校附属小学校として広島市白島町に創立されて以来、幾度かの校名や校地の変遷を経て現在に至り、平成七年十月には百二十周年を迎えます。学校規模は、単式学級十二、複式学級三、養護学級（障害児学級）三、合計十八学級児童数五百四十二名です。複式学級は、へき地・小規模校の教育研究の推進に貢献するとともに、教育実習生に複式指導の経験を得させるために、昭和四十七年に開設されました。複式学級五十八名の児童は、入学から卒業までの六年間、異年齢・少人数の条件の中で、家族的できめ細かな指導のもと、豊かな学校生活を送っています。

養護学級は、昭和三十五年の広島大学特殊教育科養護学校教員養成課程設立に伴って、昭和三十六年に開設されました。ここでは、障害児の基本的・原理的な教育に関する実践的な研究を行うとともに、教育実習の場として学生の実際の指導に当たり、障害児に対する教育と理解を推進することをねらいとしています。養護学級では、十六名の児童が一人ひとりの個性や実態に応じた学習を行っています。

「豊かな感性を育む」

教育を目指す東雲小学校

本校は、これまで、学校教育学部や公立小学校、県・市教育委員会等との連携を図って、先進的・実践的な教育研究に取り組み、毎年、授業公開・研究発表・研究協議会・講演会等を内容とする「東雲教育研究会」を開催して、その成果を発表しています。今年の研究会は、大正二年を初回として第百回になりましたので、その記念として赤松良子文部大臣の御祝詞や原田康夫学長の御挨拶をいただき、盛大に開催することができました。毎回、全国から約千名の会員の参加を得て、公立小学校等の教育研究に寄与しています。

また、毎年、研究図書や研究紀要、教育雑誌等の出版を続け、研究成果を全国に発表しています。これらのことから、研究会以外にも、随時、研究の実績を知るために他県や外国から多くの学校訪問者があります。

近年の本校の教育研究は、「自ら学ぶ意欲・態度を育成する指導と評価」を研究テーマとして、「めあて追求の授業づくり」「個が生きる授業づくり」「個が生きる授業の評価」「自己を高める評価力の育成」について指導の在り方を究明してきました。

その中では、子供たち一人ひとりが、「学習のめあて」をはっきりもって、課題解決の学習を展開する中で、「自己評価（振り返り）」を行いながら集団とともに高まっていく主体性育成の授業づくりへの取り組みを進めてきました。

その結果、子供たち一人ひとりの持ち味を尊重して、自力による課題解決の学習の仕方や自己評価の仕方を具体的に身に付けさせる過程において、子供自身の自己内対話を充実させることや自己を統制する能力を習得させること、さらには豊かな感性を育むことが大切であるということが明らかになりました。

そこで、昨年から、これまでの本校の研究や子供の実態からみて、これからの学校教育においては、特に、子供の内面に目を向け、「豊かな感性を育む」を研究テーマとして豊かな心を育てる教育の創造の研究を始めています。

そのために、基本になる考え方を確立するとともに、現在の教育課程や授業づくりを見直し、指導計画や指導の手立てなどを、豊かな感性を育む視点から構築し直していこうとしています。さらに今後は、研究を深化していくために、表現力や共感性の育成についても視点をさらに拡大して、計画的な研究を進めたいと考えています。

最後に

東雲小学校は、これからも一層、学校教育学部や公立小学校、県、市教育委員会等と強く連携を図りながら、実践的な教育研究や二十一世紀を目指した教育課程の創造等に取り組んで、その成果を蓄積し、研究会や研究図書や研究紀要、教育雑誌等の出版などによって、全国に向けて発表し、小学校教育の発展に少しでも役立ちたいと願っています。

(吉原邦明)

東雲中学校

東雲中学校の歴史

本校は、あの戦後の混乱期、昭和二十二年四月、広島(墨)師範学校男子部附属中学校として誕生しました。

爾来、半世紀というキャリアを誇る学校として現在に引き継がれています。

途中、学制の改革等により、「広島大学広島師範学校附属中学校」となり、その後「広島大学教育学部附属東雲中学校」「広島大学附属東雲中学校」と常に教育系の附属校として、その役割を果たしてきました。

東雲中学校の二つの使命

本校の使命は、その名が示す通り、現場で活躍できる力をもった教員を養成することと、教



94年1月、スキー修学旅行(北海道)第2学年の交流学习(東雲中学校)

育界の向上に直ちに役立つ教育方法・教育実践についての研究を推進することにあります。それだけに公開研究会の内容も先導的なものが多く、その回数も三十三回に及んでいます。教育界の示唆に富むようにと、その研究発表は慎重に行い、常に深化と拡充を心掛けている次第であります。

また、教員養成においては、学校教育学部を中心とする小学校・中学校・養護学校教員養成課程の五百名に亘んとする学生を毎年受け入れ、親身になって指導しています。

われわれは教員資質の向上のため、時には厳しく、また温かく学生たちの将来を見据え、一人ひとりの個性が生かせるよう、個々に応じた指導を一貫して行ってきた積もりであります。教材研究や授業指導など授業実践に力を貸すのは当然ですが、学生たちのひたむきな姿勢に対して夜の更けるのも忘れて指導することもしばしばです。

そうした実習中の人間関係は後にも生き続け、就職しても、しばしば研究室を訪れてくれます。その信頼関係は切っても切れないものになっているのであります。

教師と生徒の相互信頼に

より築かれた

「東雲憲章」

本校生徒として同じことが言えます。昭和六十年に制定された「東雲憲章」は、生徒たちの自主・自律の精神の育成をも視野に入れたものです。ここで、その「東雲憲章」を紹介してみましょう。

「私たちは、東雲で学ぶものとして、この憲章をうたい、共に歩みます。」

一 自他の生命・人権を尊重し、心身ともに健全な生活を送る。

一 人間・自然・環境・時間を大切にし、愛ある生活を送る。

一 物事に真剣に取り組み、ふり返ることによって、みんなが共に高め合う生活を送る。

人間が集団生活を行うにあたっては規則や約束が必要ですが、ここには細かな事項が載せられていません。

このことは、集団を形成している人間が互いに信頼し合うことがもつとも大切であるという考えにもとづいたものです。

従って、私たちが、人間として、人間らしく生きていくためには、私たちの良心・良識が問われてくるのです。

約束ごとが、必要と思われる場合には、私たちの力で決めていかなければならないのです。」

憲章の解説部分まで挙げてしまいましたが、生徒とともに練り上げた結果生まれたものです。当時の生徒指導部の先生方のご苦労も然ることながら、そうした基盤は本校創設時点から徐々に育まれてきたもので、当然といえば当然とも言えます。

この憲章の制定で、今まであった「生徒規則」「生徒心得」なるものは全て姿を消し、生徒の自主性・自律心に委ねたのです。これも教師と生徒の相互信頼という関係が成り立てばこそです。生徒側も、そのことを誇りとし、良心・良識に従って日々の生活を送っています。

障害児学級と交流教育

また、本校には昭和三十八年に併設された障害児学級があり、現在も各学年十名の生徒が通学しています。

障害児学級は独自のカリキュラムをもつものの、生徒は全校体制の中で教育され、学校行事を中心に健全児学級の生徒とともに楽しく生活しています。具体的には、生徒朝会・生活委員

会を始めとし、遠足・修学旅行・校外学習・体育祭・文化祭それに日々の全校清掃等教科学習以外の学校生活のほとんどを健全児学級の生徒たちと共にしています。

このような障害児学級と健全児学級の生徒の交流には、現代人に欠けているとされる一番大切な心の問題を無意識のうちに回復させ、深化させる何ものかがあります。卒業時に保護者がいつも言ってくれます。「東雲中に来て本当に良かった」と。なぜならば、入学時に比べ生徒たちの瞳が輝いているからです。

生徒たちのこうした瞳の輝きを見るたびに、それを生涯にわたって大切にしたいというのが、わたしたち教師集団の願いです。

(古谷芳太郎)

プロフィール

▽吉原邦明(よしはら・くにあき)

広島大学教育学部小学校教員養成課程(美術)卒業後、公立小学校に十年間勤務した後、広島大学附属東雲小学校で七年間勤務。さらに公立小学校及び広島市教育委員会指導主事・主任指導主事を経て、平成五年度より副校長。



▽古谷芳太郎(ふるたに・よしたろう)

広島大学教育学部小学校教員養成課程(国語)卒業後、広島市内の公立小・中学校に十四年間勤務。その後、広島大学附属東雲中学校に転任、平成四年度より副校長となり、東雲中学校では二十一年目の勤務である。

